

経済社会学会編 経済社会学の着礎

経済社会学会年報・VII

時潮社

「経済社会学の着礎」目次

共通論題

——社会科学としての経済社会学——

- ・現代の制度派経済学と経済社会学……………上村雄彦…1
- ・経済社会学の方法……………間々田孝夫…27
- 「経済についての社会学」としての経済社会学——
- ・社会科学における認識論と存在論……………加藤明彦…65
- ゴットルによるM・ウェーバー評価をとおして社会科学の統一性へ
- ・「認識論」と「存在論」をめぐる一考察……………鉢野正樹…87

自由論題

- ・ハイマンとポランニー……………小林甲一…106
- 経済主義をめぐる二つの経済体制論——
- ・ポランニーにおける「社会」概念……………角村正博…127
- ・文化価値と政治経済……………大庭治夫…141
- その関係論的考察の系譜——

- ・西ドイツにおける外国人労働者の雇用……………森田 勃……………169
- ・オイルショック後の消費者傾向の変貌……………大橋 照枝……………191
- 「脱・大衆消費社会」の到来を理論的・統計的に分析する——
- ・現代経済理論の社会的基礎……………徳永 澄憲……………221
- マネタリズム・合理的期待形成学派・サプライサイド経済学をめぐって——

書 評

- ・小泉幸之輔『労働経済の構図』……………内海 洋一……………239
- ・東条隆進『一般経済政策論の形成と理念』……………向井 利昌……………243
- △学会記事・あとがき……………259

編集後記

漸く二〇年の歳月を経て青年期に達した「経済社会学会」は、根を張り幹を太らせ葉を繁らせ、やがて花を咲かす壮年期に向うところまできた。社会科学としての「経済社会学」を共通論題とした二〇回大会（昭和五九年 早稲田大学）を記録した七号は、まさに「経済社会学の着礎」といえよう。

共通論題四編、自由論題六編を組み入れた本号は、原稿の集まりは順調、これに編集、印刷と運行するなら編集担当者にとってこれほど好ましいことはない。年報発行は費用がかかり、すべてを会員に依存する制約もあった。いま繰越原稿を持ちながらも、大会発表原稿を優先し、これに持込原稿、書評などを加える編集方針は次号も変わらない。会員のご支援をお願いする次第である。

戦後の高度成長期を経てふくれ上った「カネ余り」の経済社会は、年収を一〇〇万円も上まわった貯蓄が、あり得るはずのない「安全有利」に引きつけられ、「豊田商事」「投資ジャーナル」事件を引きおこす。ファッション界を席捲する華美で非機能的な「ホワイト イズ ビューティフル」もまた、「わび」「さび」を吹きとばした。白色は降伏と平和のいずれを表徴しようとするのであろうか。（小泉記）

経済社会学の着礎 (検印廃止)

1985年11月30日 初版第1刷発行

編集代表者 小 泉 幸之輔

発 行 者 大 内 敏 明

時 潮 社

電話 03 (811) 8024
〒113 東京都文京区本郷2-12-6 振替 東京 5-38910

印刷 西武印刷
製本 伸佐製本所

© 小泉幸之輔 1985年 (分)3036(製)14400(出)3204
Printed in Japan